



Title	天羽生岐城について
Author(s)	有馬, 卓也
Citation	懐徳堂研究. 2017, 8, p. 3-18
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/67826">https://hdl.handle.net/11094/67826</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 天羽生岐城について

有馬卓也

### はじめに

大阪から海を隔てた徳島阿南の地に徂徠学・古学の花が開いた。その担い手を高橋赤水（一七六九—一八四八）という。彼は江戸後期に生きた阿波藩の平島（現徳島県小松島市）の儒者・町医者であった。当時阿波藩の平島には室町時代に細川氏との政争に敗れた足利氏が代々居住し、平島公方（阿波公方とも）と呼ばれ、阿波藩藩主蜂須賀家と対立的なもう一つの中心を形成していた。

荻生徂徠に私淑し、古学者として著述（刊本として『古

今学話』『赤水文鈔』がある）を残した赤水には、山田該介（生卒年不詳）・岡本某（生卒年不詳）・天羽生岐城（一八二五—一八九四）といつた高弟があった。また赤水は泊園書院の藤澤東暉とも交流があり、後に天羽生岐

城を東暉のもとに留学させている。

本稿では、赤水と東暉と往復書簡、及び岐城の墓碑銘（藤澤南岳撰）・碑文（新居湘香撰）を手掛かりに、そこから読み取れる赤水と弟子たちとの交流についてまとめみたい。なお、赤水の生涯と二つの著作については、拙著『近世阿波漢学史の研究 古学者高橋赤水』（中国書店、二〇〇七）で既に紹介しているので、そちらを参照していただきたい。

なお引用文は書き下し文を示し、適宜現代語訳を付した。原漢文の資料については、これも拙著の附録を参照していただきたい。

# 第一章 赤水の弟子たち

## —山田該介から天羽生岐城へ—

だくとして、以下その概略のみ示しておこう。第一〇条は「習性と成る」に関連した問答であり、山田の問いは

本章では『古今学話』『赤水文鈔』両書に散見される弟子達の中でも、赤水の学問を継承するという意味で重んじられていたと思われる山田該介と天羽生岐城、そして赤水の弟子達と同世代であつた藤澤東暎の関係について論じてみたい。なお、赤水とその弟子達については、拙著第一章「赤水と六人の漢学者」第三節「鈴本子敬と藤澤東暎」においても記している。併せて参照されたい。

### ①後世を子雲に望む

赤水が弟子の中で最も期待を寄せていたのが山田該介である。『赤水文鈔』の井阪祐一による跋文には

向者、山田好文、赤水先生に就きて古今の学を問ひ、退きて筆記す。業未だ成らざるに、娶して病死す。  
（『文鈔』「『学話』附録小引」）

とあり、『古今学話』には第一〇条と第一四条に赤水と山田該介の問答が記されている。詳細は拙著を御覧いた

山田生曰……敢問ふ、性變化すべからざれば、性懦なる者は廉をなすべからず、性姪なる者は正人となるべからず。果てしからば、学は人に益なきなり。かつ『書』に「沈潛なれば剛克し、高明なれば柔克す」、『論語』に「教ありて類なし」、『中庸』に「果して此の道を能くすれば、愚と雖も必ず明、柔と雖も必ず強なり」、『孟子』に「居は氣を移し、養は体を移す」。これ等の數語、氣質を變化すとも云べし。如何。（『古今学話』）

〔現代語訳〕山田君が言う「……敢て質問します。性が変化させることのできないものであるならば、臆病な性格の者は意志の固いしさぎよい人間になれず、よこしまな性格の者は行動の折り目正しい人間にはなれない。とすれば、学問は学ぶ者に何の益もないことになる。また『書經』には「やさしすぎる性質であれば剛に向かうようにし、志や行いが高潔すぎる性質であれば、柔に向かうようにする」とあり、『論語』には「教育というものがあつて、そこには貴賤の別はない」とあり、『中庸』には「この

こと（博く学び、詳しく問う）が実践できれば、愚

寄東畠先生書」

か者であつても必ず賢明な者となり、柔弱な者であつても必ず勇者となる」とあり、『孟子』には「居るところの地位は、その人の気風を変化させ、身体の奉養はその体を変化させる」とある。これらの語は、気質の変化を説いているとも言えます。どうでしようか」と。

というものであった。この問い合わせるだけでも、山田の学識の高さをうかがい知ることができよう。また第一四条での山田の問い合わせは

翁撫然曰<sup>いはく</sup>「われ老たり。争論を好まず。足下は今<sup>お</sup>楊子雲なる哉。天下の広き、亦楊子雲あつて足下を和せん」と。〔古今学話〕

と言つて赤水を揚雄にたとえ、赤水を理解し賛同してくれるもう一人の揚雄が必ずどこかにいるだろうと言つてゐることに因つてゐる。赤水にとつて東畠はもう一人の揚雄であつた。赤水は東畠の古学者としての学識を称して

というものであり、いずれも赤水は古学者としての立場から、その問い合わせに丁寧に答えてゐる。二人の師弟関係がどのようなものであつたかを垣間見ることのできる問答となつてゐる。その山田は夭逝してしまつた。<sup>(8)</sup>恐らくそれからしばらくして赤水は藤澤東畠の『訂正清版二弁』を読んだのであろう。赤水の東畠宛書簡の中に

物子に忠なる者、優渥濃至にして、人をして敬服せしむ。嗟乎<sup>ああ</sup>、当今の世、古学の衰を興す者は、足下に非ずして其れ誰か。〔赤水先生寄東畠先生書〕

と記している。赤水が山田の死後に出会つたもう一人の揚雄であつた。

子雲を後世に望むとは、即ち是れのみ。〔赤水先生

という記述がある。子雲とは前漢末の思想家揚雄をさす。これは『古今学話』の末尾に赤水との論争に敗れた朱子学者の性理翁（詳細は不明）が

②当時の古学者が置かれた状況さて、古学を主軸とする彼らが当時置かれていた状況はどのようなものであったのだろうか。東駢の赤水宛返書の中に次のような文がある。

独り近世の譲園学を修むる者は、以て誉を致すべからず、禄を干むべからず。復古の衰ふること極まれり。然れども誉と禄とを抛ちて之を修むる者は、眞に之を嗜むものなり。眞に之を嗜む者、海内幾何ぞ。

〔東駢先生復赤水先生書〕

〔現代語訳〕現在、徂徠先生の譲園学を修めている者は、名譽を得られないばかりでなく、仕事を求めることもできない状態です。徂徎先生の古学も、ここに衰退極まつております。しかしながら、名声と職を棄てようとも、古学を修めようとする者は、眞に古学を好む者です。現在真に古学を好む者が一体何人いるでしょうか。

これに対する赤水の直接のコメントは残っていないが、『古今学話』の岡元跋に当時の状況に対する赤水のコメントが見られる。

これを見れば、当時の宋学者たちに対する赤水の批判的な姿勢がよくわかる。この赤水の姿勢は、墓碑銘に記された銘の中に

銘に曰く「利や名や、一髪よりも軽し。然る后志立ち、匏庵せざるを得。学に根拠あり、確乎として奪はれず。……〔赤水高橋先生墓碑銘〕」

赤水先生は、古学に従事し、恒に宋学に反す。嘗て云ふ「孔子曰く「信じて古を好む」と。又曰く「古の学者は己の為にす」と。又曰く「君子は道を謀りて、食を謀らず」と。我何ぞ性理を唱へて、時好に合せんや。〔古今学話〕岡元跋）

〔現代語訳〕赤水先生は、古学を修められ、いつも宋学を批判しておられる。以前次のように言われた。「孔子は「先王の教えを信じ好む」と言い、また「昔の学問する者は自分の修養のために学んだ」と言い、また「立派な人間は道を得ようとつとめても、食を得ようとつとめることはない」と言つた。私がどうして宋学者のように性理を唱えて時流に合わせることをしようか。

とあり、利益や名声などは他人に奪われるが、身につけた学問は誰も奪うことができないという彼への評語は、彼の姿勢をもつともよくあらわしているし、またその姿勢が決して表層的なものではなかつたことを証明しているだろう。

この姿勢は、藤澤南岳の「天羽生岐城墓碑銘（以下「墓碑銘」と略記）」からもうかがうことができ、その冒頭部に

家に恒産ありて以て人を教ふる者は、眞儒なり。句  
讀を授くるに衣食する者は、君子は取らず。是れ先  
子の常言なり。（墓碑銘）

とあつて、赤水と同じ姿勢の発言が南岳の父東亥（「先子」）にもあつたことを記している。そして、このことは、上に言及したように、南岳の「墓碑銘」の冒頭部によくあらわれている。

さらに、その末尾には

赤翁の遺範、学は實に人の為にす。材を達し英を育て、以て身を利するに非ず。一方の学派、醇乎とし  
て其れ醇なり。（墓碑銘）

とあつて、これも赤水・東亥の学党の学問的姿勢、即ち学問とは我が身を利するためにあるのではなく、人材の育成にあるのだということを繰り返し述べている。

南岳が「余が家に於ては、奕世の誼あり」（墓碑銘）と述べているが、ここに泊園書院と阿波漢学のつながりの深さと確かさを見てとることができる。

## 第二章 天羽生岐城について

先の拙著では天羽生岐城に関する記述が不十分であつたので、本章でその補足を行つておきたい。ただし、天羽生の著作は残つておらず、手掛かりとしては「赤水文鈔」所収の「再復天羽生」と藤澤南岳による「墓碑銘」、及び新居湘香による「天羽生岐城翁碑文（以下「碑文」と略記）」があるのみである。「再復天羽生」は拙著第四章に訳注を掲載しているので、詳細はそちらを御覧いただくとして、ここではその概略のみ記しておく。

「再復天羽生」はその表題からも明らかなように、複数回の両者の論争の断片であるが、そこで論じられているものは「廟堂の制」（<sup>15</sup>）「大夫執羔の礼」（<sup>16</sup>）「饔餼用物」（<sup>17</sup>）といつた礼に関するものであり、質の高い議論が展開されている。「再復天羽生」において取り上げたいのは、師弟間で

意見の相違があつた時に、赤水が岐城に示した学者としての心のありようである。まず冒頭に次のように言う。

高見、見示せられ、豈に其の辱きに謝せざらんや。  
唯だ其の言の愚意に合せざるものあり。而して縋を  
藏して交を結ぶは、我が志に非ず。是を以て従ふべ  
からざるの義を陳べて、以て之に復するのみ。豈に  
勝心ありて然らんや。今、再駁を得て之を読むに、  
足下、前論を持して、更に強詞を加へ、愈いよ滋ま  
す潰潰たり。今、敢て置きて対へざらんや。道を争  
ふを悪むも、然りと雖も道に係る者は弁ぜずして已

むは、亦我が志に非ず。謹んで諸を聖經に徴し、諸  
を事理人情に考へ、敢て其の違を弁ぜん。幸くは  
寛胸もて電覽を賜らんことを。『赤水文鈔』再復天  
心で見てもらえれば幸甚です。

この部分から、両者の人となりを垣間見ることができ  
るよう思う。岐城は弟子とはいえ、師赤水の意見を鵜  
呑みにするような人物ではなかつた。ただし、自説の主  
張については、強引な所もあつたのであろう。その部分  
を赤水にたしなめられている。両者の間には研ぎ澄まさ  
れた学問的応酬があつたことがうがえる。

また、最後の一文も赤水の学問的姿勢、そしてそれは  
天羽生も受け継いだであろう学統の精神を伝えるものと  
言つてよかろう。

〔現代語訳〕君の御高説を賜り、どうしてその厚情  
に感謝しないことがあります。心の乱  
の中には卑見と合致しないものがあります。心の乱  
れを隠して今後も交流を続けることは私の本意では  
ありません。ですから私が君の意見に従えない理由  
をしたためて返書した次第です。どうして君に負け  
まいとしての心からでありましよう。さて君の改め

本論は一家言たること固し。然りと雖も天下の是と

くことができましよう。先王孔子の道について、今  
さら是非を論争することは本意ではありませんが、  
道に関わることを正さずに置いておくのも、私の本  
意ではありません。謹んでこれらの問題を経書に照  
らし合わせ、また物事の道理や人の情と併せ考へて、  
敢えて君の考え方を論じたいと思ひます。寛大な

する所を是とし、天下の非とする所を非とするは、是れ亡論なるのみ。唯だ天下の是とする所にして、吾独り其の非を見ることあり。天下の非とする所にして、吾独り其の是を見ることあり。是に於てか論を立つ。阮の無鬼論<sup>(19)</sup>、柳の四維論<sup>(20)</sup>、歐陽の春秋論<sup>(21)</sup>、皆、一家言たり。其の当否は暫く置く。論体、焉を然りとする者あり。仮使、之を駁せんと欲するも、宜しく「孔子の後に聖人の若きものの世に出づることあらん」と言ふべくして可なり。然らずんば、徒に一家言を以て之を打破するも、服するに足らざるなり。余、故に前書に之を斥く。足下、平心もて諸を思へ。(『赤水文鈔』再復天羽生)

『現代語訳』以上は私の個人的な見解です。しかし世間の人々が正しいとするものが必ず正しく、世間の人々が誤っているとするものが必ず誤っているとみなすのは暴論です。世間の人々が正しいとみなすものでも、私がその中に誤りを見出すことがあります。しかし、世間の人々が誤っているとみなすものでも、私がその中に正しさを見出すことがあります。ここに議論が成立するのです。たとえば阮籍の「無鬼論」・柳宗元の「四維論」・歐陽脩の「春秋論」は、すべて彼らの個人的な見解を述べたものです。彼らの議論の正否は当面置いておきましょう。彼らの論の形式については、これをよしとする者もいます。たとえ彼らの論に反駁を加えようと思つても、ここは「孔子の後に再び聖人が世に現れて判断を下すでしょう」と言うべきであります。もしそつすることをせずに、個人的な見解だけで彼らを非難するということであれば、それは心服するに足る議論とはなりません。ですから私は先の手紙で君の意見を退けたのです。君も冷静になつてもう一度考えてみて下さい。

何を正しいと見、何を誤りと見るか。自らの見解の正誤に対する実に謙虚な赤水の思いをここに見ることがであります。学問に対する真摯な姿勢は、学究者の有るべき姿を示していよう。赤水とはかような人物であった。そして、その薰陶・教化を受けた岐城も同様であったと思われる。そのことをうかがえる資料が「墓碑銘」と「碑文」に見えるので、最後に両碑文の記述を簡単に追つていこう。

天羽生岐城は徳島に帰つた後、

藤澤東畦に大阪に従学し、帰りて家業を承け、塾を

開きて徒に授く。郷校講師・小学教員を経て、教部省訓導と為り、少講義に補せらる。(「碑文」)

せていくこととなる。

## 附録

とあるから、師赤水と同じように、当初は家業である病院を営みつつ、塾を開いていた。そして、恐らく塾の評判が高かつたのであろう、以後、那賀郡郷学校暇修館の講師、小学校教員、教部省訓導などの職を歴任している。教員として学生に接する様は、以下のように記される。

人と為り沈実厳整、確乎として守る所あり。人を教へて倦まず。門人敬して服従す。(「墓碑銘」)

赤翁の遺範、学は實に人の為にす。材を達し英を育て、以て身を利するに非ず。一方の学派、醇乎として其れ醇なり。(「墓碑銘」)

翁の教化の篤き……。(「碑文」)

ここに、これらの岐城の姿勢は「赤水の遺範」であつたと言う。南岳の手になる文であるから、父東亥に言及するのを避けたのであろう。赤水や東亥の「人の為にす」る学は、岐城ら後継者を得、この後さらに次の花を咲か

最後に附録として拙著に未掲載であった「天羽生岐城墓碑銘」と「天羽生岐城翁碑文」の全文を掲げておく。本碑文は竹治貞夫氏の『阿波碑文後集』<sup>(2)</sup>に収録されており、ここに示すものはその転載である。

### 〔凡例〕

一、本附録は阿南市領家の共同墓地にある「天羽生岐城墓碑銘」(写真1～4)と、阿南市領家の天満神社の境内に建てられた「岐城天羽生翁碑文」(写真5)の翻刻である。なお「天羽生岐城墓碑銘」の後に「附記」として天羽生岐城の妻鷺崎氏の碑文を載せるが、省略した。

一、竹治氏の『阿波碑文後集』は原文・書き下し・注釈語釈の順に記載されている。本稿もそれに従つた。ただし、「墓碑銘」の天羽生岐城・高橋赤水・藤澤南岳の三項は削除した。

一、竹治氏は注釈語釈で原典を引用する場合、引用文に

返り点・送り仮名を付して表記しているが、本稿では返り点・送り仮名を省略し、原文+書き下し文として表記した。

I 天羽生岐城墓碑銘（藤澤南岳）

【原文】

岐城先生墓

家有恒產以教人者、真儒也。衣食于授句讀者、君子不取矣。是先子之常言也。奉此語而能弘斯道者、岐城先生其人也。先生諱信章、字子文、稱内藏太郎、岐城其號、天羽生其姓、平高望裔孫也。祖嘗食邑于上總天羽郡、因以爲氏。後移阿事三好氏、食名東郡。秦氏侵阿、家破爲庶士。及建囊時、給仕藩大夫賀島氏。至隆助君、善軒岐術、術大行。君諱信敏、實先生之父也。

先生以文政乙酉四月十六日生。幼學赤水高橋翁、又來從先子于大阪。學成南歸、唱古學于其鄉。爲人沈實嚴整、確乎有所守。教人不倦。門人敬而服從焉。明治廿七年十一月二日、病歿。享年七十。初配鷺崎氏、舉一男六女而歿。繼配賀嶋氏、無子。嫡子信成、亦從余學。既葬先生于先塋域、乃以遺命、求碣銘于余。

余曰、自赤水翁歿後、講道于南方、紹志述之者五十年。且晚年爲本藩所徵、列士籍。故優游卒歲、教學自任。其

功德、豈可湮沒乎。況於余家、有奕世之誼。因其可銘乎哉。銘曰、赤翁遺範、學實爲人。達材育英、非以利身。一方學派、醇乎其醇。

明治廿九年七月

東讚 藤澤南岳撰  
西讚 上田樹德書

【書き下し】

岐城先生の墓

家に恒產<sup>〔1〕</sup>ありて以て人を教ふる者は、真儒なり。句讀を授くるに衣食する者は、君子は取らず。是れ先子<sup>〔2〕</sup>の常言なり。此の語を奉じて能く斯の道を弘むる者は、岐城先生其の人なり。先生諱は信章、字は子文、稱は内藏太郎、岐城は其の号、天羽生は其の姓<sup>〔3〕</sup>。平高望<sup>〔4〕</sup>の裔孫なり。祖嘗て上総の天羽郡<sup>〔5〕</sup>に食邑し、因りて以て氏と爲す。後阿に移りて三好氏に事へ、名東郡に食む。秦氏<sup>〔6〕</sup>の阿を侵すや、家破れて庶士と爲る。建囊<sup>〔7〕</sup>の時に及びて、藩の大夫賀島氏<sup>〔8〕</sup>に給仕す。隆助君に至りて、軒岐の術<sup>〔9〕</sup>を善くし、術大いに行はる。君諱は信敏、実に先生の父なり。

先生は文政乙酉<sup>〔10〕</sup>四月十六日を以て生る。幼にして赤水高橋翁に学び、又来りて先子<sup>〔11〕</sup>に大阪に従ふ。学成りて南に帰り、古学を其の郷に唱ふ。人と爲り沈実

厳整、確乎として守る所あり。人を教へて倦まず。門人敬して服従す。明治廿七年十月二日、病んで歿す。享年七十。初配は鷺崎氏、二男六女を挙げて歿す。繼配

は賀嶋氏、子無し。嫡子信成、亦余に従つて学ぶ。既に先生を先塋の域に葬り、乃ち遺命を以て碣銘を余に求む。

余曰く「赤水翁歿して自り後、道を南方に講じ、志を紹いで之を述ぶる者五十年。且つ晩年は本藩の徵す所と為りて、士籍に列す。故に優游〔11〕して歳を卒へ、教學もて自ら任す。其の功德、豈に湮没〔12〕す可けんや。況や余が家に於ては、奕世〔13〕の誼有り。因りて其れ銘す可き乎哉」と。銘に曰く、

赤翁の遺範、学は實に人の為にす〔14〕。材を達し英を育て、以て身を利するに非ず。一方の学派、醇乎として其れ醇なり。

明治廿九年七月

東讃 藤澤南岳撰  
西讃 上田樹徳書

〔1〕一定の生業。『孟子』梁惠王上「無恒産、而有恒心者、惟士為能。若民、則無恒産因無恒心。(恒産なくして、恒心ある者は、惟だ士のみ能くすと為す。民の若きは、則ち恒産なければ因りて恒心なし。)」集注「恒、常也。産、生業也。恒産、可常生之業也。恒心、人所常有

之善心也。(恒は常なり。産は生業なり。恒産とは常に生ずべきの業なり。恒心とは人の常に有する所の善心なり。)」

〔2〕死んだ父。藤澤東駿をいう。名は輔、字は元發、昌藏と称し、東駿・泊園と号す。讃岐の人。中山城山に学び、古学の復興を以て自ら任じた。大阪に泊園書院を開いて教え、元治元年(一八六四)十二月十六日没、年七十一。

〔3〕桓武平氏の祖。桓武天皇の皇子葛原親王の孫。高見王の子。寛平元年(八八九)、平の姓を賜り、從五位下、上総介に任せられた。生没年未詳。

〔4〕天羽はもとアマハとよむ。明治二十九年、望陀(もうた)・周淮(すえ、訛してシウス)・天羽の三郡を合わせて君津郡とす。千葉県内。

〔5〕土佐の長曾我部氏は、秦河勝(はたのかわかつ、古代、山城にいた帰化豪族。聖徳太子に仕え、命により六〇三年山城国葛野郡、今の京都市太秦に、蜂岡寺、今の広隆寺を建てた)の子孫という。岡田鴨里『日本外史補』卷五、長曾我部氏に、「長曾我部氏、出於秦河勝。河勝二十五世之裔、曰能俊。自信濃徒土佐、居長岡郡長曾我部、因氏焉。(長曾我部氏は、秦の河勝に出づ。河勝二十五世の裔を、能俊と曰ふ。信濃

より土佐に徙り、長岡郡長曾我部に居り、因りて氏とす。」と。天正十年（一五八二）八月、三好長治の弟で勝瑞城主となつた十河存保（そごうまさやす）は、中富川の決戦に長曾我部元親の軍に敗れ、九月城下の盟を結び讃岐に退いた。

〔⑥〕武器武具を袋におさめて鎧をおろし、用いないこと。

偃武に同じ。『礼記』樂記「名之曰建橐（之に名づけて建橐と曰ふ。）」注「兵甲之衣曰橐（兵甲の衣を橐と曰ふ。）」建は鍵、かぎをかけること。ここは元和偃武をいう。元和元年（一六一五）大阪夏の陣を最後に、戦乱がやんで太平になつたこと。

〔⑦〕初代賀島政慶は尾張の人。母は蜂須賀正勝の女。天正十三年、十四歳の時阿波に来り、富岡の牛岐城に住し、一万石を領した。後に藩の家老に列し、寛永四年（一六一七）没。年五十六。子政重継ぎ、以下子孫相受けで明治に及ぶ。

〔⑧〕軒は黄帝軒轅氏、岐は岐伯。共に医学の祖とされ、

医学・医術を軒岐と称する。『帝王世紀』「黄帝使岐伯司医藥（黄帝岐伯をして医藥を司らしむ。）」

〔⑨〕文政八年（一八二五）。

〔⑩〕南岳の父藤澤東暉。

〔⑪〕ひまでゆつたりする意。閑暇の意。『詩』小雅・采薇「優哉游哉、亦是戻矣（優なるかな游なるかな、亦是れ戻れり。）」鄭箋「亦優游自安止於是（亦優游して自ら是に安止す。）」孔叢子『獨治』「徒能保其祖業、優游以卒歲者也（徒に能く其の祖業を保ち、優游以て歳を卒ふる者なり。）」ゆつたりとして一生を送る

をいう。

〔⑫〕うずもれしづむ、ほろびる。涙は沈むこと。

〔⑬〕だいたい。奕は重なる意。

〔⑭〕『論語』憲問「子曰、古之学者為己、今之学者為人（子曰く、古の学者は己の為めにし、今の学者は人の為めにす。）」の語を逆用して、句を成している。

## II 岐城天羽生翁碑文（新居湘香）

### 【原文】

岐城天羽生翁碑文。正二位勲一等侯爵。蜂須賀茂韶題

額。

翁諱信章、天羽生氏、號岐城。富岡人。家世仕國老賀

島氏。考信敏善醫。翁幼學先子及高橋赤水、從學藤澤東暉於大阪、歸承家業、開塾授徒。經鄉校講師・小學教員、爲教部省訓導、補少講義。明治二十七年十月、病歿。今茲己亥、門人建碑、謁余文。曩者藤澤南岳、既叙翁學行、采

作墓誌、無用余辭也。

唯先生之德、之行、一郷皆識之、固非侍文字而傳者。

而門人皆感其恩、至今不衰、欲報其德。可無以表欽慕之誠乎。余益信翁教化之篤、非尋常學究所及也。今世號弟子者、概不知師恩爲何物、或至公然議其非者。獨翁門人能如此。豈非薰陶得其宜而然耶。翁幼受業先子、歲時存問、事之以禮。余爲童子時、常見翁、儼乎其貌、溫乎其言、今猶在目。翁不忘舊誼如彼。宜其門人、仰其德愈久而不忘也。乃作銘。銘曰、

博文約禮、懿德斯則、橘井杏林、仁術斯得。老而不倦、死而後息。山高水長、人皆稱德。

明治三十二年冬日

湘香學人 新敦撰并書

【書き下し】

山高く水長し〔①〕。岐城天羽生翁碑文。正二位勲一等侯爵。蜂須賀茂韶題額。

翁諱は信章、天羽生氏、岐城と号す。富岡の人。

家世国老賀島氏に仕ふ。考信敏医を善くす。翁は幼にして先子〔②〕及び高橋赤水に学び、藤澤東畠に大阪に従学し、帰りて家業を承け、塾を開きて徒に授く。郷校

〔③〕講師・小学教員を経て、教部省〔④〕訓導と為り、少講義に補〔⑤〕せらる。明治二十七年十月、病みて歿す。今茲己亥、門人碑を建て、余に文を謁〔⑥〕ふ。曩

者に藤澤南岳既に翁の学行を叙して墓誌を作れば、余の辞を用いる無きなり。

唯先生の徳、の行〔⑦〕は、一郷皆之を識り、固より文字を待〔⑧〕つて伝はる者に非ず。而して門人皆其の恩に感じ、今に至るまで衰へず、其の徳に報いんと欲す。以て欽慕の誠を表すこと無かる可けんや。余益ます翁の教化の篤き、尋常学究の及ぶ所に非ざるを信ずるなり。今世弟子と号する者、概ね師恩の何物たるかを知らず、或は公然其の非を議するに至る者あり。独り翁の門人のみ能く此の如し。豈薰陶其の宜しきを得て然るに非ずや。翁は幼にして業を先子に受け、歲時の存問〔⑨〕、之に事ふるに礼を以てす。余童子為りし時、常に翁を見、儼乎たる其の貌、温乎たる其の言、今猶目に在り。翁の旧誼を忘れざること彼の如し。宜なり其の門人の其の徳を仰ぐこと愈久しくして忘れざるや。乃ち銘を作る。銘に曰く、

博文約礼〔⑩〕、懿德〔⑪〕に斯れ則り、橘井〔⑫〕杏林〔⑬〕、仁術を斯れ得たり。老いて倦まず、死して後息む。山高く水長し、人皆徳を称す。

明治三十二年冬日 湘香學人 新敦〔⑭〕撰并に書

〔①〕人品節操の高潔なことを、山の高く流の長いのに譬

えてほめたことば。宋范仲淹『嚴先生祠堂記』「歌曰、

雲山蒼蒼、江水泱泱、先生之風、山高水長（歌に曰く、

雲山蒼蒼、江水泱泱、先生の風、山高く水長し。）」

〔②〕湘香の父、新居水竹を指す。

〔③〕那賀郡郷学校。「暇修館」。弘化三年（一八四六）二

月、藩主齊裕が郡代高木真藏に命じ造築させた。家老賀島出雲（政延）富岡の采地五畝九歩を以て館の敷地とし、神原五郎左衛門・吹田与右衛門等開創に尽力し、学資を醸出す。岩本贊庵講師に任じ、天羽生信章・古川宣助・木田有徳・井阪專齡等句読師に任ず。廢藩置県の際、富丘郷学校と称し、後また改めて富岡小学校と称して、今日に至る。（『阿波国教育沿革史』による。）

〔④〕明治五年三月、神祇省の廢止とともに設置され、神道・仏教の教義や社寺・陵墓に関する事務を管理した官庁。同十年一月、廢止されて、内務省に移された。訓導は神道教会の職名。

〔⑤〕官職につけること。

〔⑥〕こう、もとめる。『左伝』昭十六年「宣子謁諸鄭伯（宣子諸を鄭伯に謁ふ）」。注「謁請也（謁は請なり）」。『列子』天瑞「弟子敢有所謁、先生將何以教（弟子敢て謁ふ所あらば、先生將何を以て教ふる）」。

〔⑦〕「先生之行」の略。

〔⑧〕侍は待の誤刻と考えられる。

〔⑨〕安否を見舞うこと。心にかけて問い合わせる意。『史記』孟嘗君伝「使使存問献遺其親戚（使をして存問

し其の親戚に献遺せしむ）」。

〔⑩〕ひろく学問を修め、物事の道理をきわめた上、礼をもってこれをひきしめて、正道をあやまたぬようになること。『論語』雍也「君子博学於文、約之以礼、亦可以弗畔矣（君子は博く文を学び、之を約するに礼を以てせば、亦以て畔かざるべし。）」。

〔⑪〕美德。『詩』大雅・烝民「天生烝民、有物有則。民之秉彝、好是懿德（天烝民を生ず、物あれば則あり。民の彝を秉る、是の懿徳を好む）」。毛伝「烝衆、物事、則法、彝常、懿美也（烝は衆、物は事、則は法、彝は常、懿は美なり。）」。

〔⑫〕湖南省彬県の東にある。晋の蘇耽が死に臨み、明年疾疫あるを予知し、庭中の井水及び簷辺の橘葉を用いて病を癒やす法を伝え、人を救う。故に時人橘井と称した。後に転じて医者をいう。『神仙伝』蘇仙公「蘇仙公白母曰、某受命當仙。被召有期。云々。母曰、汝去之後、使我如何存活。先生曰、明年天下疫疾。庭中井水、簷辺橘樹、可以代養。井水一升、橘葉一枚、

可療一人（蘇仙公母に白して曰く「某命を受けて

仙に當る。召さるること期あり。云々」と。母曰く「汝

去るの後、我をして如何ぞ存活せしめん」と。先生

曰く「明年天下疫疾あらん。庭中の井水、簷辺の橘

樹、以て養に代ふべし。井水一升、橘葉一枚、一人

を療すべし」と）。『類書纂要』「晋蘇耽種橘鑿井、以

療人疾。時疾病者、食橘葉、飲泉水、即癒。号橘井（晋

の蘇耽 橘を種え井を鑿ち、以て人の疾を療す。時に

疾病の者、橘葉を食し、泉水を飲めば、即ち癒ゆ。

橘井と号す。」

〔13〕三國・呉の董奉が人の病を治して錢を求めず、重傷には五本、軽傷には一本の杏樹を植えさせ、数年にして鬱林を成し、董仙杏林と号した故事より、医者の美称となる。『五車韻瑞』『神仙伝』、董奉居廬山、治病輒癒。重者種杏五株、軽者一株。遂成林。号董仙杏林（『神仙伝』）に「董奉は廬山に居り、病を治せば輒ち癒ゆ。重き者は杏五株を種え、軽き者は一株。遂に林を成す。董仙杏林と号す。」

〔14〕湘香は名は敦二郎、新居水竹の子、札幌農学校の漢学教官などを勤め、大正六年没、年六十九。（この注文は『阿波碑文集後集』では冒頭の碑文の概要を記す部分に記されていてある。）

注

（1）弘化四年（一八四七）、赤水が七九歳の時に刊行したもの。

本書は赤水と門人たちとの問答の中での生まれたものである。

（2）天保一二年（一八四二）、赤水が七三歳の時に刊行したもので、それまでの赤水の主だった草稿や書簡が収録されている。

（3）拙著の第五章二二三頁、及び二三九頁。

（4）『書經』洪範に「沈潛なれば剛克し、高明なれば柔克す」とある。

（5）『論語』衛靈公に「教ありて類なし」とある。

（6）『中庸』二〇章に「果して此の道を能くすれば、愚なりと雖も必ず明に、柔なりと雖も必ず強なり」とある。

（7）『孟子』尽心下に「孟子、范より齊に之き、齊王の子を望見し、喟然として嘆じて曰く「居は氣を移し、養は体を移す。大なるかな居や。夫れ尽く人の子に非ざるか」と」とある。

（8）井阪の跋文に赤水が山田のノートを見つけ出したのが天保六年のこととあるから、山田の死はそれよりそう遠くない前のことと思われる。

（9）前漢末期から王莽の新王朝にかけて生きた思想家で、『太玄經』『法言』『方言』などの著作を残す一方で、王莽の政治に与した点や自殺未遂事件を起こした点などから、批判的に見られる思想家でもある。

（10）『論語』述而に「子曰く「述べて作らず。信じて古を好む。」

- (11) 「論語」憲問に「子曰く「古の学者は己の為にす。今の学者は人の為にす」と」とある。今の宋学者たちが人に知られることを目的に学問を行つていると批判したもの。
- (12) 「論語」衛靈公に「子曰く「君子は道を謀りて、食を謀らず・耕すや餓其の中に入り、学ぶや禄其の中に入り。君子は道を憂へて貧を憂へず」と」とある。今や宋学者たちだけが職につける状況を批判したもの。
- (13) 危ういこと。
- (14) 代々の、の意。
- (15) 阿南市在住の子孫の方に確認したが、先の戦災で消失したとのことである。
- (16) 廟堂の建築用式は土の身分でも建てられるか否か、という論争。『儀礼』とその鄭玄注をめぐる議論。
- (17) 大夫は仔羊を手土産とするのはいつから始まつた儀礼か、という論争。『春秋左氏伝』や『礼記』をめぐる論争。
- (18) 肉や家畜を礼物として用いるのは贅沢であるのか、という論争。
- (19) 阮籍（二二〇～二六三）は三国魏の人で、竹林の七賢の一人。「無鬼論」は鬼神が存在しないことを論じたもの。
- (20) 柳宗元（七七三～八一九）は唐の文人・政治家で、唐宋八大家の一人。「四維論」は『管子』牧民に見える「四維」論が間違いであることを論じたもの。

(21) 欧陽脩（一〇〇七～一〇七二）は北宋の政治家・文学者で、唐宋八大家の一人。「春秋論」は『春秋』を考える場合には、三伝に拠らず経文に拠るべきであることを論じたもの。

(22) 竹治貞夫氏は徳島県内に建てられた碑を探索され、『阿波碑文文集』（昭和五四）、「阿波碑文続集」（昭和五九）、「阿波碑文後集」（昭和六〇）、「阿波碑文補集」（平成七）の四冊を私家版として出された。いずれも贋写版、いわゆるガリ版刷りを製本したもので、凡て一三七一頁に及ぶ。

\* 本稿は東アジア文化交流学会第8回国際学術大会（二〇一五年五月七日、於関西大学）での口頭発表「藤澤東駿と高橋赤水」に加筆修正したものである。



写真2



写真1



写真4



写真3



写真5